東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報　第１３号

GSICS TOHOKU UNIVERSITY

編集・発行　東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局　発行日：2015 年３月１８日

〒980-8576 仙台市青葉区川内４１　TEL（022）795-7556　FAX（022）795-7583　E-MAIL〈dosokai@intcul.tohoku.ac.jp〉

国際文化研究科のリニューアル

黒田　卓

（国際文化研究科同窓会会長・イスラム圏研究講座教授）

同窓生の皆さま、お変わりなくお過ごしでしょうか。前号の同窓会報冒頭で、私は国際文化研究科が歩んできた 20 年の歴史に着目し、静かに降り積もる晩秋の落葉のように、研究科での日々の教育研究の営みをとおして、多彩で独創的な人材を着実に世に送り出してきたことを特筆いたしました。今号のご挨拶では、そのような教育研究の実績のうえに立って、本研究科が平成 27 年度から従来の教育研究体制を改編し、リニューアルした体制で新たな一歩を踏み出すことをまずはお知らせしなければなりません。

国際文化研究科の改組は、東北大学全体の機能強化に資するという側面もありますが、なによりも 20 年前と比較した研究科を取り巻く状況の大きな変化、なかでも急速に進展するグローバリゼーションの流れが大きな背景としてあります。「国際舞台で活躍できる」高度な専門能力を備えた人材の育成は、本研究科創設以来の教育目標でしたが、近年では、高いコミュニケーション能力や深い異文化理解力、さらにグローバルな問題と向き合い解決を図る能力といった、より具体性を帯びた基盤的能力を備える、いわゆるグローバル人材の養成が要請されるようになっています。また、国際文化研究をめぐる研究状況も様変わりです。主権国家との関係、すなわち国際関係における文化的ファクターの探究という位相から、個人やグループ、マイノリティといった主体（アクター）が国を軽々と越境し、網の目のように複雑に結び合う―こういう昨今の状況を映し出して、国際文化研究も国家のみならず個人や集団にも焦点をシフトしつつ、よりグローバルな拡がりを意識して問題を立て追究してゆく時代に入っているのだといえます。研究科を構成する学生たちもこうした時代の趨勢を反映し、留学生の比重が増し国際色豊かなものに変わってきました。

このような状況変化に対応し、研究科は現在の３専攻 16 講座の体制から、１専攻８講座の体制へと組織改編を行います。これはたんに数を減らしたという意味ではなく、よりニーズに適合したラインアップに再編するという主旨にもとづいています。つまり、国際文化研究専攻という１専攻の下に教育プログラムの単位として３つの系、１）地域文化研究系、２）グローバル共生社会研究系、３）言語総合研究系を設け、それぞれにヨーロッパ・アメリカ研究講座、アジア・アフリカ研究講座、国際日本研究講座（以上地域系）、国際政治経済論講座、国際環境資源政策論講座、多文化共生論講座（以上グローバル系）、言語科学研究講座、応用言語研究講座（以上言語系）という新たな講座を配置いたします。このうちから一例だけを申しますと、国際日本研究講座は、世界のなかの日本という視点に立って総合的な日本研究を目指すもので、世界の多様な日本研究のニーズに応えることが期待されています。そうした日本研究の拠点形成への一環として、総長裁量経費を措置していただき、本年１月末には日本語・日本研究を基軸に大規模な国際シンポジウムなどを開催いたしました（詳しくは本号特集記事をご参照下さい）。

たしかに同窓生の皆さまが研鑽を積まれた講座がなくなる、ないしは名前が変わるというのは、一抹の寂しさを覚えられることと推察いたします。しかし実際には、スタッフの専門性によりフィットし、スタッフがより緊密に連携・協力でき、また学生が研究できる間口も広く開けているというのが今回の講座体制だと考えています。皆さまの「ふるさと」がバージョンアップしたものと受け止めていただき、ますますのご支援ご協力を賜りますようお願いしたいと思います。なお、今回より修了生の手による近況報告や情報提供・交換を目的に、新しいコラム欄「アルムニひろば」を設けました。この欄へのご感想やご意見、そしてなによりも積極的なご投稿をお待ちしております。

第１３回同窓会総会と講演会のご案内

第１３回同窓会総会と同窓会講演会を次のとおり開催します。またこれに引き続き国際文化研究科平成２６年度修了祝賀会が開催されます。同窓会会員の皆さまにはどちらにも奮ってご参加くださいますようご案内申し上げます。

日時：２０１５年３月２５日（水）１５時～
＊研究科学位記伝達式に引き続き開催しますので、会員の皆さまは１４時２０分の学位記伝達式からご臨席ください。

場所：マルチメディア教育研究棟６階大ホール

講師：髙橋　葵 氏
（大日本印刷株式会社 情報ソリューション事業部 東北第１営業本部　ビジネス開発営業部 ・ ヨーロッパ文化論講座前期課程修了）

演題：「H. アーレントと私」

国際文化研究科同窓会事務局

第１２回総会と講演会の報告

第１２回総会を２０１４年３月２６日にマルチメディア教育研究棟６階大ホールにて開催しました。総会に先立ち、鶴田　祐紀 氏による講演会を開催しました。

講演会要旨

「企業に「就職」し「研究」するということ」

東洋電機製造株式会社　研究所 技術研究部
次世代調査研究室
鶴田　祐紀（科学技術交流論講座前期課程修了）

１．はじめに

私が国際文化研究科を修了したのは、もう 10 年近く前になる 2005 年 3 月です。当時は科学技術交流論講座に所属しておりました。今日は、私が現在所属している企業の例を中心に、企業における「異文化」の存在、文理融合分野の出身者が企業で行う「研究」、という 2 つの観点でお話させていただければと思います。

２．会社という「現場」にある「たたかい」と「異文化」

どんな会社にも「現場」はあります。製造業における「現場」というと、工場の生産ラインをイメージする方が多いと思いますが、物を作っている場所だけが「現場」ではありません。顧客との打ち合わせやクレーム対応といった、営業デスクや会議室であっても「現場」です。そういった現場には「たたかい」もあれば、まさに国際文化研究科が対象としている「異文化」もあります。

「たたかい」の例を端的に挙げると、「売る方は高く売りたい、買う方は安く買いたい」という「顧客とのたたかい」があります。これは営業部門としては売る方ですが、購買部門としては買う方になります。購入前に顧客の希望が二転三転するのは日常茶飯事であり、そのたびに多くの関係者が思い悩むことになります。また、自前主義にこだわると製品を安く作れず、結果的に売れなくなることがあります。一方で買い物ばかりで製品を作るとコア技術がなくなり、差別化ができなくなる…ということで、安くしなければ売れなくなることにつながります。

また、顧客には当社以外の競合先が売り込みに来ていますので、「競合先とのたたかい」もあります。ところが、競合先については対立することもあれば、標準化や規格化の場で協力する場合もあります。敵なのですが、完全な敵ではないという場合も往々にしてあります。

一方、自社内にも「異文化」は存在します。「上司・経営者と一般従業員」というのは想像がつくかと思いますが、一般従業員の中にも「正規社員(労働組合の組合員)と非正規社員(非組合員)」といった処遇の違いがあります。この二つは勤務時間と給料の差に直結しており、時に深い溝を生むことがあります。

また、異なる職種間というのも異文化です。顧客でトラブルが発生した際、営業担当・設計担当・購買担当・製造担当の対立や責任のなすりつけが発生し泥仕合になることもあります。大抵の場合、明確な悪者は誰もいないのですが、職種が違うと理解できないことも増えていきます。

３．企業で「研究する」とは？

まず、一括りに「研究開発」と呼ばれていますが、企業における「研究」と「開発」は明確に区別されています。当社における研究は「将来的な技術の進展をみすえつつ、新たな事業や新製品に結びつく新技術及び基盤技術について、基礎的・応用的な研究を行う」仕事であり、開発は「研究によって生み出された技術を元に、試作製品の設計、製作を行う」仕事です。一方、製品にかかわる仕事として「設計」がありますが、これは「営業技術が検討した仕様をより具体的に検討し、必要な技術・性能等を明らかにして、図面、回路、ソフトウェア等を作成する」仕事となります。

では、こういった「研究」において文理融合分野の出身者の知識が求められるのが「イノベーション」の分野です。この単語を聞いたことある方がいると思いますが、これは 1911 年にシュンペーター(経済学者)が定義しました。日本語では「技術革新」と訳されていますが、本来は技術的分野にとどまりません。これに関連して、少し前から「技術経営(Management Of Technology)」という言葉も使われるようになりました。これは技術的知識だけでも足りませんし、経営学だけでも足りません。まさに文理融合の人材が求められている場といえるでしょう。私も今自社で取り組んでいる仕事はこういった見方に沿うものであり、例えば最近は「革新的アイデアを継続的に生み出す社風・制度を作るにはどうすればよいか？」を考えています。

４．おわりに

一般的なイメージとして、研究は論文や特許をたくさん書くことが仕事だと思われています。確かにそれが主流なことは否定しませんが、論文を著しにくい分野であっても、企業が持続的に成長し続けていくには必要なことだと考えています。企業が持続することで、結果的に社員自身やその家族、あるいは顧客や取引先の幸せに繋がればと考えています。国際文化研究科の修了生の進路としてはかなり異色だと思いますが、こういう例もあるということで参考にしてください。

第２１回国際文化基礎講座の報告

第２１回国際文化基礎講座（平成２６年１１月）では『「知」の国際文化学　―近世近代日本の学術と世界―』と題して、本研究科の３教員が日頃の研究の一端を披露されました。ここにその講演概要をご紹介します。

謎の漢文を解読せよ
—白話文解読に挑んだ日本人たち—

勝山　　稔（アジア文化論講座准教授）

日本では、古くから中国の書籍を愛好してきた。そこに書かれた文章は、いわゆる漢文――当時の中国の知識人が文章を書くときに使った「書きことば（文言）」である。中国では、古くから「話すときは話しことば、文章を書くときには書きことば」というエチケットがあった。そのため、文字に書かれたものは、当然「書きことば」であった。

ところが本講義のテーマとなる「謎の漢文」は、今までの日本人が長く親しんでいた漢文とは大きく異なる、中国人の「話しことば（口語）」を主体とした文章――つまり白話（はくわ）小説である。

「白話」の「白」は、現在の日本語でも「告白」「自白」「科白（せりふ）」など「白」には「話す」という意味がある。つまり白話小説は、「話しことば」の小説である。中国も明代になると、古来のエチケットが破られて、一般民衆なら誰でも知っている「話しことば」で文章が書かれ始めた。しかもその種の出版が大いに人気を博し、中国では大きな流行を見せていたのである。

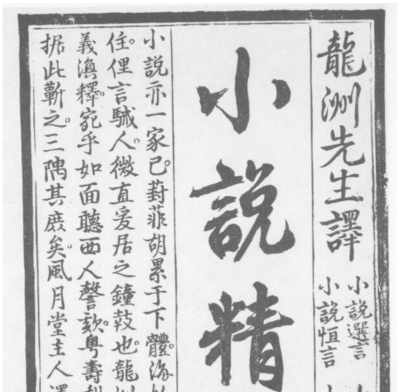
このようにして漢文から千三百年遅れて「謎の漢文」は日本にやってきた。初めてこれを見た日本人は驚いたに違いない。しかし、その後日本人は様々な方法で解読を始め、その後二百年足らずで、日本人は精緻な翻訳技術を手に入れることとなる。しかも面白いことに、「謎の漢文」の読解技術は、民間の知識人が主導で行われ、大学の専門家が躊躇しているうちに、民間人が現在の翻訳手法を確立してしまった。つまり、現在の日本の漫画・アニメ・ドラマ・ゲームなどを介して『西遊記』や『三国志演義』『水滸伝』などが人口に膾炙しているのは、これら名もなき民間の知識人の努力があってこそ実現したのである。

江戸時代、中国の白話小説が長崎に到着した。日本人は、この初めて見る「謎の漢文」に大いに戸惑った。しかし、白話小説が中国人の口語であることが判ると、奇想天外な活用方法を思いついた。それが、中国語の語学教材としての活用である。

当時の日本人は、同時代の中国の制度や社会・文物について知るためには、やはり中国語の知識が必要であると考えていた。そのため当時の著名な学者・荻生徂徠は、中国語に詳しい岡島冠山を招いて、俗語を含めた中国語の研究の重要性を説いていた。ところが中国人はおろか中国語の知識を持つ人は、ごく少数に限られていた。

白話小説の解読作業で解ってきたことは、従来の訓読では対応できない語彙が多いということであり、漢文訓読では限界があったのだ。

日本人が白話小説の読解に苦闘していた頃、つまり明治時代から大正時代にかけては、日本でも日本語の文語文から口語文へという言文一致運動の機運が高まりを見せていた。そのため日本語でも口語文が発達・普及し、この時期には白話の持ち味である細かなニュアンスが現代日本語で再現できるようになり、中国の「話しことばの文体（白話）」の受け入れ先となる日本の「話しことばの文体」も整備され、積年の「ねじれ現象」を解消できる素地が出来つつあった。



しかし、事態はそう生やさしいものではない。古来の伝統を重んじる漢学にとっては、明治時代になってようやく出てきた日本の口語文で翻訳するなどことには拒否反応が強かった。またそもそも中国文学の中で、白話小説の研究自体も長い間異端視されていた。そういうこともあり、曰く付きの白話小説の口語訳を試みる中国文学の専門家は少なく、学界の総意をまとめることなど到底できなかった。そして学界が躊躇しているうちに、言わば中国文学とは異なる人々によって口語訳が模索され始めた。

その嚆矢にあたるのが、佐藤春夫の口語訳「百花村（ひゃっかそん）物語」である。内実はドイツ語からの重訳であったが、「百花村物語」をきっかけに、日本ではこぞって口語訳が試みられることとなった。

また、その後も口語訳が発表されたが、彼らの口語訳は日本ではなく上海や南京で行われ、翻訳では中国人の協力者が存在した。白話に関連する専門辞書等の工具書が整備されていない当時は、中国人との交流と協力が不可欠だったのだ。

このように見ると、白話小説の訓読翻訳は、従来文語用の読解法で口語文が翻訳されるという矛盾をはらんでいたが、それを是正するには、日本語の口語の成熟や、海外渡航の活発化に伴う直接的接触の拡大や中国語の習得など、純粋に技術的な問題の他に、日本の国際化という外的要因も大きく作用していたと考えることができるのである。

言語の学と「理解」の方法 ―「認識されたものを認識」する文献学の東西比較―

江藤　裕之（言語文化交流論講座教授）

江戸時代を代表する学問の１つである国学は、古代の文献研究を通して古代日本人の思想と文化に迫り、外来の文明に侵食される前の日本人の心の原風景を明らかにしようとしました。その中心にあったのが言葉の研究です。このような古代人の世界を追体験しようとする国学の学問態度は、「認識されたものの認識」を目指す西洋の文献学の理念に比せられることがあります。本発表では、国学の大成者である本居宣長（1730-1801）の学問観・言語観を検討しながら、西洋古代に起源を発し、18～19 世紀のドイツ語圏を中心とした西欧で完成を見た文献学との類似性を探りつつ、その背後にある共通した社会状況や知的状況を考えてみました。

宣長の学問の真髄は、古文献を忠実に読み込み、その言葉を正しく解釈していくことで、その言葉によって立ち現れてくる世界を理解し、追体験していくことにありました。つまり、言葉を正しく解き、あるがままの事実と、そのあるがままの意味を受け取ることが、宣長の一貫した学問的態度だったのです。宣長が生涯をかけて追い求めたものは日本人の本来の心―古意（いにしえごころ）―であり、それは和歌（やまとうた）や古文（いにしえぶみ）、すなわち大和言葉で表現されたものの中にあると考えました。その古意を失わせるものが漢意（からごころ）であり、宣長はその漢意を取り除くことで古意を見ようとしたのです。宣長にとっての学問とは、日本、そして、日本人の道を学ぶことであり、その方法が漢意に染まる前の日本人の心が生きている古典を研究することだったのです。

言葉を理解することで古代の文献を正しく解釈し、そこから古意を悟るという方法の背後には、言（ことば）と事（わざ）と心（こころ）とが互いに相応してよく似ているとする宣長の考えがありました。「言」とは言葉の使いようであり、「事」は行為、そして「心」は思考です。つまり、言語と思考、そして行為はそれぞれ関係があるというのが宣長の考えなのです。これを根拠に、古人の行いや考えを知るには、その言葉、そしてそれが表れている古典を徹底して学べばよいということになります。結局のところ、言葉を大切にし、その研究から人間の精神が産み出したもの、すなわち認識された価値や意味を言葉から追究していくことが、宣長の学問への姿勢でありました。

このことはまた、偶然ですが、西洋の文献学に通じるものがあります。ヘレニズム時代に起源のある文献学は優れた古典を読み、時間と空間を超えてその世界に踏み込んで行きたいという情熱から始まりました。その後、古代への憧れ、古典への愛とともに、文献学は古典文学研究、そしてその中心となる古典語研究と同一視される時代が続きます。そして、文献学は 19 世紀のドイツにおいて、新しい方向へと進みます。19 世紀ドイツの文献学者であるアウグスト・ベックは、文献学者（フィロローグ）はプラトンのように思索をしたり、シェークスピアのように著作をすることはないが、プラトンの思索の結果として生まれた思想を、シェークスピアの著作の結果として生れた作品を理解し、説明しなければならないとします。つまり、人間精神によって作られたものから、その人間精神を再認識すること、すなわち「認識されたものの認識」が文献学（フィロロギー）の目標だと定めたのです。

19 世紀のドイツ語圏の諸邦は１つの国民国家として連携するために民族の意識を高めていく必要があり、その中心となるのが国語意識の高揚でした。江戸中期の日本も社会が成熟していくにつれて、中国文明に対して「日本とは何か」という意識が生じ、漢意や儒意の影響を受けていない純粋な大和心の探究へと向かいました。双方とも、古文献を忠実に読み、そこに書かれていることを正しく解釈していくことで、その言葉によって現れている世界を理解し、追体験していくという方法を取りました。このように、国民意識、それを支える国語意識とが相まって出てきた結果として、日本では国学、そしてドイツではフィロロギーという知的運動が生じたのです。

August Boeckh

本居宣長

明治になって、新たな日本研究に向けて学問的方法論の整備が進められたとき、西洋から「理解」の学問としてのフィロロギー（文献学）が紹介されました。人間の精神によって生産されたもの、つまり認識されたものを認識するという文献学の理念と方法は、古典を読み込み、その言葉を正しく解き明かし、古意、すなわち日本人の本来の心を追体験しようとした国学の方法と重なるものでした。芳賀矢一（1867-1927）や村岡典嗣（1884-1946）といった明治の新国学者たちは、日本の伝統的な国学と、西洋からの新たな学問としてのフィロロギーの並行性に注目しつつ、その理念と方法に学びつつ国学を体系的な「学」に高めようとしたのです。そこには、真の日本（人）の心を理解しようとする、ロゴスへの愛があったと言ってよいでしょう。

近代日本におけるフランス象徴主義受容
―上田敏（1874-1916）とその時代―

坂巻　康司　**（比較文化論講座准教授）**

◆象徴主義と日本

今日、フランス象徴主義は 19 世紀末のフランスで生じた美学の一潮流として当たり前の事柄のように認識されています。しかし、それが日本に紹介された当初は文壇が騒然とするほどの大きな衝撃を引き起こしました。この講演ではその実態について、中心人物であった英文学者上田敏、及び同時代の数名の作家の反応を通して簡単に紹介しました。まず、冒頭で象徴主義という概念の複雑さについて説明をした後、この流派を代表する詩人たちの思想と作品を簡単に紹介しました。彼らには確かに共通の基盤があるものの、詩人によって主張がさまざまであり、象徴主義が多様な性格を持っていることを初めに示しました。

◆近代日本への受容―上田敏の『海潮音』

続いて、象徴主義の受容状況を紹介するに先立ち、明治時代の海外文学の翻訳状況について幾つかの歴史的事実を説明しました。この時代はいわゆる「翻訳文学」が誕生し、それが急速に発展する時期に相当します。フランス文学は英文学・ドイツ文学・ロシア文学とほぼ同時に日本に移入され、翻訳されていきました。そのような状況を支えたのが、新聞や雑誌などのメディアの急速な発達です。黒岩涙香などの重要な出版人兼翻訳家の活躍によって次々に刊行された文芸雑誌がこれらの翻訳文学を掲載し、海外文学が日本人の目に触れるようになったのです。そのような中、東京帝大の教員らによって雑誌『帝國文學』が刊行されました。

『帝國文學』はフランス象徴主義を日本に紹介するに当たって先駆的な役割を果たします。その中で最も重要な仕事をしたのが英文学者の上田敏でした。彼はこの雑誌にフランス象徴主義の実態を伝える重要な論考を数多く執筆し、また、作品の翻訳を掲載しました。明治 38 年（1905 年）、遂に敏の翻訳詩をまとめた訳詩集『海潮音』が刊行され、西洋の新しい詩の傾向、特に象徴主義の詩を知らしめたことで大きな反響を巻き起こします。『海潮音』はとりわけ蒲原有明、薄田泣菫という二大象徴主義詩人、および、その後の詩壇の中心人物となる北原白秋、三木露風に深い影響を及ぼすことになるのです。

それでは『海潮音』はどのような特徴を持っている訳詩集だったのでしょうか。実は、敏は象徴主義の特徴を完全には理解せずに訳していたようです。また、ヴェルレーヌの「秋の歌」を訳した「落葉」などは人口に膾炙した訳文で知られていますが、原文がもたらすものとはかけ離れた世界を提示していたという事は否定できません。

◆上田敏のマラルメ理解とその他の受容例

ここで一つの例として、マラルメの韻文詩 « Soupir »の敏による翻訳「嗟嘆」を検討しました。マラルメは象徴主義詩人の中で最も難解な思想を持っており、当時の日本の知識人には理解するのが相当に困難だったと思われます。敏が翻訳した「嗟嘆」においても、西洋近代が示す陰鬱な世界が日本の伝統的な雅な世界に置き換えられている他、「抒情詩」のように作品を解釈してしまっている点が特徴的です。敏は幾つかの論文の中でマラルメの詩を訳し、その特徴を説明していますが、残念ながら要点を外した解説をしてしまっています。とはいえ、その理解はフランス語原文を読解することで成り立っており、英訳からマラルメを読んだその他の作家よりは遥かに高いレベルに到達していたことは確かです。

それでは、その他の作家たちはどのようにマラルメを理解したのでしょうか。例えば、長谷川天渓や野口米次郎のような当時は著名であったジャーナリスト・詩人の文章を読んでみると、圧倒的に英語圏からの理解、つまり詩人アーサー・シモンズ（英語圏に象徴主義を紹介した詩人）によるマラルメ理解に依存しているということが明らかになります。これが岩野泡鳴のような誇大妄想の強い詩人になると、完全に自分自身の思想に引き付けてマラルメを語ろうとし、真の理解からは遠退いてしまいます。このようにフランス象徴主義の移入当初、マラルメは「理解されないまま受容された」という不幸な事態に陥っていました。

◆夏目漱石の冷ややかな態度、そして…

そのような中で、全く独自の道を示したのが夏目漱石です。漱石は自身の小説『行人』の中で、マラルメが自宅で開いていたサロン「火曜会」に言及し、日本における象徴主義の受容に関してさりげなく揶揄をしているようです。つまり、「日本ではマラルメそのものではなく、シモンズ、あるいは上田敏がのさばっている」と。実際、漱石は上田敏と同時に東京帝大に赴任した英文学者でしたが、学者としてのキャリアは敏とは対照的であり、次第にアカデミズムから遠ざかります。漱石は敏による海外文学の紹介に不満があったようですが、その著書の中で、日本における象徴主義の紹介のあり方に対するいらだちを表明したのかもしれません。

一つ付け加えるとすれば、象徴主義が受容された時代は日露戦争終結時の混乱状態であったということがあります。先の見えぬ不透明な時代に現実から全く遊離した文学が西洋から移入されたという事実は、近代文学の成立を考える上で興味深い事態だと思われます。

国際文化研究科主催行事の報告

国際シンポジウム
国際共同教育ワークショップ
グローバル化する世界における日本語・日本学研究

小野　尚之（言語コミュニケーション論講座教授）

2015 年 1 月 27 日と 28 日の両日、本研究科主催の国際シンポジウムおよび国際共同教育ワークショップ「グローバル化する世界における日本語・日本学研究」が、世界 10 カ国の大学から 40 数名の研究者および学生を招待して開催されました。この国際シンポジウムは、平成 26 年度総長裁量経費の支援を受けて実施された「グローバル化する世界における日本語・日本学の研究拠点形成を目指す国際共同研究プロジェクト」の一環として行われたもので、これまで本研究科が学術交流を積極的に行ってきた大学との国際連携をさらに強め、世界に発信する研究教育の拠点形成を目指すことを趣旨としたものです。

国際ワークショップでは、各大学の研究者がそれぞれの先端的な研究紹介を行い、フロアとの活発な質疑応答がありました。また、国際文化研究科、北京大学、中央大学校、チュラロンコーン大学、タマサート大学の共同で行われ国際共同教育ワークショップでは、博士課程、修士課程の学生が研究発表を行い、参加した各大学の教員や学生との議論を深めました。

このシンポジウムおよびワークショップを通じて、日本語・日本学研究の世界的な広がりを改めて実感するとともに、これまでともすれば疎かになっていた研究機関そしてそこに所属する研究者のつながりの重要さを認識する機会になりました。これを機に、国際文化研究科のみならず、東北大学全体における日本研究の拠点形成を積極的に進めて行かなくてはならないと考えました。

国際シンポジウムプログラム（2015 年 1 月 27 日）

日本文化研究
佐野正人（東北大学）
「東アジア世界の中の韓流・日流・華流――ドラマ、J-POP、K-POP」
エメラルド・キング（ヴィクトリア大学ウェリントン）
「オーストラレーシア（豪・乳）におけるコスプレ研究」
劉雨珍（南開大学）
「筆談と東アジアの文化交流――清朝初代駐日公使館員の在日筆談資料を中心に
翁家慧（北京大学）
「メタファーとしてのトポス――大江健三郎と莫言の比較研究」
メタセート・ナムティップ（チュラロンコーン大学）
「天竺徳兵衛のみたシャム」

日本語教育
ニャンジャローンスック・スニーラット（タマサート大学）
「タイ人大学生の日本語学習における不安――既習者と未習者の比較」
小野桂子（プリンストン大学）
「もう一つの日本語教育――非漢字語圏で古文と漢文を教える」
ザイド・ムハマド・ズィン（プトラ大学）
「日・マ比較語彙研究――意味コード付けについて」

日本語研究
ナンダン・ラフマット（パジャジャラン大学）
「日本語複合動詞の後項動詞内在アスペクトについて―複合動詞習得のためのイメージスキーマ」
李吉鎔・李イスル　（中央大学校）
「『パンニハムハサムニダ』の言語的特徴について－カタカナ韓国語とハングル日本語の分析」
ナロック・ハイコ（東北大学）
「日本語の共時的、通時的研究」
イレーナ･スルダノヴィッチ（リュブリャーナ大学）
「実証的データを利用したコロケーション研究の可能性」
ウォン・ガン・リン（マラヤ大学）
「コミュニケーションにおける沈黙の意味と役割―日本人、イギリス人とマレーシア人の比較」
森田笑（シンガポール国立大学）
「質問に対する応答の冒頭における『ええと』の役割」
松本善子（スタンフォード大学）
「日常的視点の効果―高齢女性の談話考察から」

国際共同教育ワークショッププログラム（2015 年 1 月 28 日）

卞載喜 Byun Jaehee（中央大学校 修士課程 2 年）
「能『隅田川』における悲劇の物狂い」
崔在浩 Choe Jaeho（中央大学校 修士課程 1 年）
「さとり世代と無縁社会―『一人暮らし』への考察」
周雲 Zhou Yun（北京大学 博士課程 2 年）
「闇の中の光―『機動武闘伝Ｇガンダム』の忍者思想についての研究」
朱琳（東北大学 博士課程 3 年）
「戦時下日本における中国研究の一側面―中国文学研究会の漢学批判について」
ピアグリン・スィリンヤー（タクシン大学人文社会学部日本語科講師）
「漢字の自律学習サイトの利用状況とニーズ―タイの大学における日本語学習者及び教師を対象とする調査」
プラティープチンダー・ポーンナッチャー（チュラロンコーン大学 修士課程 2 年）
「断りの場面における理由説明の一考察―タイ語と日本語を比較して」
侯鵬図（北京大学 博士課程 1 年）
「認知言語学から見るコソアド詞の意味拡張―ソレデを例に」
大槻くるみ（東北大学 博士課程 1 年）
「近代から現代の日本語心理動詞文の自他選択に表れる事態把握の通時的変化」

「アルムニひろば」同窓生のコラム

熊本　早苗　岩手県立大学盛岡短期大学部准教授
（アメリカ研究講座後期課程修了）

同窓生相互の親交や情報交換を図る目的で、今回から同窓生の手による「コラム」欄が新たに設けられたことに感謝したい。なぜなら、国際文化研究科という学際的な学びの場は、当時も今も、刺激的な研究テーマに満ちており、同窓生同士の情報交換は、研究環境をより高みへと導いてくれると期待できるからである。在学当時、多くの先生方から貴重なご教示を賜り、そして、研究者人生の師ともいうべき恩師や先輩方と出会えた。学び舎を巣立った後も、多種多様な分野において活躍する先輩方や同窓生から、自分は良い刺激を拝受している。また、困難に直面した際には、貴重なご助言や激励を頂いている。こんな未熟な自分が同窓生コラム初回を担当させて頂くのは僭越だが、今後より一層充実した内容へ発展する前段として、どうかご容赦願いたい。

近年、拙論において考察しているテーマの一つに「災害と文学」がある。文学が複合大災害をどう捉え、どのように表象することができるのか。その表象は他の表象メディアとどう関わるのか。核時代における災害と放射能汚染という極めて深刻、かつ政治的な問題を、〈環境文学〉はいかに表現し、表象しうるのかという問題に、果敢に自らの小さな足場から論じる試みである。災害後の世界を生き抜くための言葉の源泉を、広義の意味での〈環境文学〉の視点から見出し、災害をめぐる言論に、ある種共通する「証言」に関して、日米のエコクリティシズムの観点から考察している。詳細については、近刊『核と災害の表象――日米の応答と証言』(熊本早苗・信岡朝子共編著、英宝社) をご覧頂けたら幸いである。

環境文学・文化研究と連動する活動として、東日本大震災以降、米国オハイオ大学(Ohio University, Athens)と協働ボランティアを行っている。この活動は 2011 年度から現在 (2014 年度) も継続中である。活動内容は、岩手県沿岸の被災地における「菜の花プロジェクト」や、「水ボランティア」など多岐に渡る。現地のニーズは刻々と変化し、より深刻化している側面もある。「公助」でしか解決できない問題もあり、被災地での復興はまだまだ実感を伴わないと話す人も多い。そのような中、復興支援活動における日米の協働から見えてきたのは、客観的な地域理解、あるいは「場所の感覚」の重要性と「共感」する体験であった。災害が頻発する現代において、「共助」は必要不可欠であり、そのために開かれた地域として情報を発信することが求められている。

もう一つの研究テーマは、「国際リニアコライダー誘致と多文化共生」である。2013 年 8 月、岩手県の北上山地が「国際リニアコライダー」(以下、ILC と略) の国内建設候補地として選定された。現時点において、国は ILC の日本誘致を決定していないものの、2014 年度政府予算に調査検討費 5000 万円を計上し、具体的な検討に着手している。そこで、岩手県内における外国人研究者受け入れ体制の整備が進展している。高エネルギー加速器研究機構 (KEK) の報告書によると、国際研究拠点となる ILC が実現した場合、東北に研究者・技術者とその家族 5000 人から 6000 人程度が居住し、そのうちの半数程度が外国人とその家族となる見込みである。所属する多文化共生研究会では、岩手県の科学 ILC 推進室と協働で県内の実態調査を行う一方、県外・国外の先進事例研究をしている。そのような中、同窓生である李 善姫氏の存在は大きい。李氏から、東北地方における多文化共生について多くを学んでいる。李氏の「震災後の東北における地域再編と結婚移民女性の社会参画に関する文化人類学的考察」 の成果報告が楽しみである。多文化共生社会の推進や男女共同参画社会に向けて取り組む中で、同窓生との交流を深めることができ感謝している。

【写真１】岩手県大槌町での「菜の花プロジェクト」の様子。被災した河川敷を清掃し、菜の花を植える復興支援活動。(参加者撮影 2014 年９月)

【写真２】岩手県立大学の学長や本部長も参加する日米協働震災復興支援活動へと成長 (本庄国際奨学金財団の留学生も多数参加) (参加者撮影 2014 年 9 月)

事務局より

①「アルムニひろば」について

今号から新たに同窓生のコラム「アルムニひろば」を設けました。「アルムニ alumni」は同窓生を意味するラテン語です。このページでは、修了後の同窓生の活動を紹介してゆきます。投稿も歓迎いたします。

②同窓会メールマガジンについて

事務局では会員の皆さまに興味をもっていただける情報を随時お届けしたいと思います。また、会員の皆さまからもメールマガジンに掲載してほしい情報などをお寄せください。

③メールアドレスについて

メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

国際文化研究科同窓会
〈dosokai@intcul.tohoku.ac.jp〉

④同窓会ホームページ

これまでの総会、理事会、会報、その他の資料を掲載していますのでご覧ください。
http://www.intcul.tohoku.ac.jp/alumni/

⑤同窓会懇親会について

事務局では今後とも会員の要望に基づき懇親会を開催したいと考えていますので開催希望などお寄せください。

⑥ご意見・ご提案等を！

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたらご連絡願います。お寄せいただいた個人情報は厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

⑦会費・寄付金の納入のお願い

会則第 11 条第1項及び 12 条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

○入学、進学及び編入学者で未納の方
(1) 国際文化研究科前期課程の学生：6,000円
(2) 国際文化研究科後期課程の学生：
編入学者：8,000円
進学者：6,000円

○上記以外の方（修了生、在学生、現教職員・元教職員等）にはご寄付という形のご支援をお願いできますと幸いです。

○会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口に直接お納めください。

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会
郵便振替口座番号：02220-5-66621